

## 『センチメンタル ジャーニー』

～会主催海外山行「満州・長白山」紀行～

大塚 忠彦

山上の火口湖の稜線にぼんやりと佇んで、深い碧色の水面とお鉢の対岸の岬々たる山巔を飽かず眺めていた。雲が流れて火口湖の水面の色が刻々と変わり紺や藍や碧や翠に映えたりした。水面に映った対岸の逆さ連嶺に漣が震えていた。ふと我に返ると、湖上は一面のガスに覆われて薄墨色に沈んでいたのがであった。

ここは「長白山」山頂の火口湖「天池」である。天池は周囲 14km、最大水深 380m にも達する神秘的なカルデラ湖で、その中央に北朝鮮と中国の国境が走っている。火山国の日本にもカルデラ湖は沢山あるが、このように大きな山上湖は初めて見た。南東側の対岸に見える山々は北朝鮮の山々。その衝立に邪魔されて見ることはできないが、その向こうには北朝鮮と遙か先の韓国の国土、更には日本海が広がっているはずである。目を北西に向ければ山麓に広がる原始林の樹海の果てに満州の広大な茶色の曠野が霞んでいた。



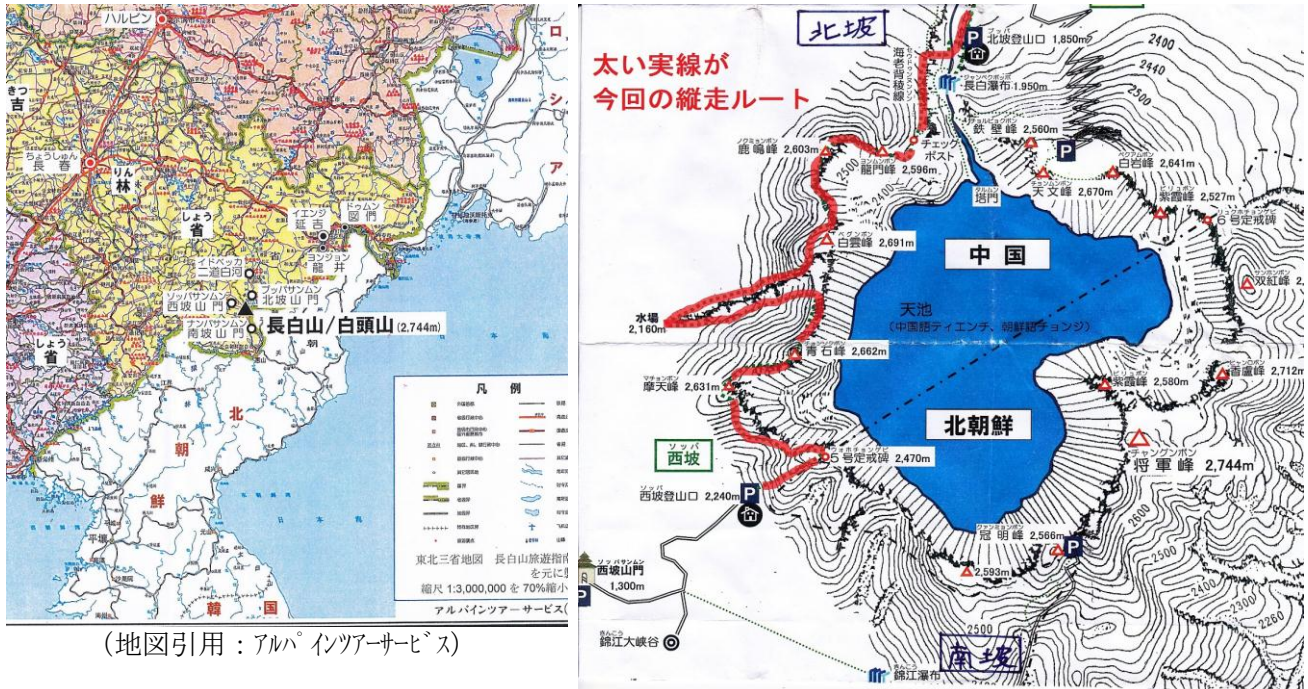
今年のシリウス海外山行は赤沢さんが昨夏下見に行った中国（吉林省）・北朝鮮国境の「長白山」（韓国・朝鮮名は「白頭山」）に決まり、その下見を基に「歴史と山上湖とお花畑～朝鮮半島最高峰の縦走～」というキャッチフレーズで募集が開始され、13人が参加した。私は腰椎骨折中の病み上がりで、どうしようかと逡巡していたら“ナニ、お花畑をノンビリ歩く鼻歌交じりの片目のケンケンだよ”という彼の言に騙されて参加したのであったが、これが実は相当手強い相手で鼻歌交じりなどというシロモノではないことを現地で思い知らされた。

実は私は3歳まで朝鮮半島付け根の元山（今は北朝鮮）に住んでいたもので、白頭山の天辺からならひょっとして我が幼少頃の住処の辺りも遥かに見えるかもと実現可能性皆無の夢想到に耽ったり、日本に引き揚げて来て以来一度でいいからかつて住んでいた異国の町の様子を見に行きたいものといつも言っていた老母にも話してやりたいと、出発が近づくにつれて段々と燃えてきたのであった。

梅雨が明けた当日の7月9日、総勢13人は成田から出発、韓国仁川経由で空路吉林省第2の都市延吉に入った。延吉は中国と北朝鮮及びロシアの3国国境に近い街で、ビルやマンションの建設ラッシュの様相を呈していた。空港で待ち受けてくれていた現地エージェントの山岳ガイド2人、日本語ガイド1人と合流して専用バスで登山基地の西坡山門に向かう。途中には大きな市街や集落が所々にあるが、概ね畑の中の丘陵地帯を貫く一本道の高速道路で、道はやがて・山麓の深い樹林地帯をウネウネと登る一本道となった。一般車はここまでというドンゾマリの一軒家のロッジまで約4時間のバスの旅であった。ロッジは「長白山天賜旅游度假村」といういかめしい名の新築の宿であったが、公営だからであろうかサービスなどのソフト面はイマイチ、イマサンであった。中国では驚くに当たらないことであろう。

長白山に入るには中国側からは今回我々が利用した西坡山門、北坡山門と南坡山門があり、北朝鮮側からは外輪山の最高峰である將軍峰（2744m）まで車道が付いているそうだ。ただし、將軍峰は北朝鮮領であるので、我々はこの最高峰を踏むことはできず、ただ対岸から眺めるだけであった。將軍峰頂上からは湖面までケーブルカーが敷設してあり、將軍様（金正日）が時々魚を釣りに来るためのものとか。

翌朝、<sup>ソッパサンムン</sup>西坡山門のビジターセンターで入山手続きをして入山。ここから登山口までは一般車は通行禁止で、専用のシャトルバスに乗る。環境面への配慮か或いは政府の収入を確保するためのものなのか、沢山のシャトルバスが駐車していた。百台くらいはあるのではなかろうか。丁度美女平から室堂に向かう立山貫光バスルートと全く同じような景色の高山帯を約40分、西坡登山口(2240m)に到着。



ここからお鉢までは1280段の階段を登る。長白山は朝鮮や満州の人々にとっては心のふるさととも言うべき故地だそうで、一生に一度はお参りすべき聖山と崇められているようだ。そのためか立派な石段が作っており、その横には木道の階段も併設されていた。観光客が多い時には往路と復路の階段を別々に使うようだ。この階段は中国や韓国から来た観光客でごった返していた。駕籠屋の雲助の呼び込みの声が甲高くてうるさい。病み上がりの私は駕籠に乗って大名気分を味わいたかったが、ガイドの言では駕籠に乗って運ばれるのは歩くより疲れるのだそうで、また同行の皆さんからも非難の眼差しで見られるのも癪だからと、「筋力の不足はなけなしの金力で補う」主義の私も仕方なくトボトボと歩いて登ったが、わずか30分ほどの登りで足はガクガク、頭はフラフラという始末。しかし、この苦労も登り切ったお鉢の一角からの神秘的なカルデラ湖の眺望が補ってくれて余りあった。冒頭に書いたとおりである。

ここは「<sup>ウォホチョングピ</sup>5号定戒碑」(2470m)という国境線で、国境の石柱には中国側には『中国 37 2009』、北朝鮮側には『丕口 37 2009』とハグルで刻んであった。国境線上にはロープや警告看板も設置されているが、監視兵がいるわけでもなく観光客は皆少しだけ北朝鮮の地に踏み込んで越境のスリル?を楽しんでいた。我々もそれに倣った。

さて、大勢の観光客はここまでで、ここから愈々お鉢の縦走が始まる。お鉢は概ね2600m台の標高であるが、途中で切り立った崖なども多くガレ場やザレ場を巻いたりして進むので結構アップダウンが激しい。右手に天池や北朝鮮側のお鉢を望みながらのコースであるが、ガイドの話では、この山は天候の変化が激しくこの天池が晴れているのは稀有なことだそうで、普通はガスの中を歩くことが多いのだそうだ。今回は曇りがちではあったが、天池の全貌を見ることができてラッキーであった。我々13人は余ほど日頃の心がけが良いのではあるまいか。

余談になるが、実は私がこの山に行ってみようと思ったもう一つの理由は、冬場などに大陸から日本

海に流入する寒波などの上層気流がこの長白山脈にぶつかって左右に分流し、対馬辺りで再び合流するために北九州や山陰・北陸地方に異常な暴風雪をもたらしたり、済州島の南側海上でカルマンの渦という珍しい渦雲を発生させたりするという気象上の特異点になっているので、気象に興味を持っている私は一度はこの現場の大気の流れを肌で実感してみたかったのである。この希望を神様が叶えてくれたのか午後からは雷雨となったが、他の皆さんにはお気の毒なことであった。横道に逸れたが縦走路に戻ろう。



青石峰<sup>チョンソクボン</sup> (2662m) から白雲峰<sup>ベグンボン</sup> (29691m) までは切り立ったガレなので稜線通しには行けない。一旦500mほど谷を降ってまた瓦礫の径を稜線まで登り返すことになる。勿体ないが致仕方ない。この谷を降った気持ちの良い草地上で昼食。昼食は中国式ノリ巻で、でかい太巻きが2本分入っていた。一人では喰いきれないボリュームだ。残しては悪いとKさんなどは全部平らげたために、腹が膨れすぎて以降の登りで苦しむこととなった。さて、ここが「行こか戻るか」の最後のチェックポイントで、戻るとしても今下ってきた道を再び500m登り返すことは困難で、この谷をそのまま下って下の道路に出るのであるが、それも時間的には縦走を続けるのと同じであるし、途中の樹林帯には熊やイノシシも出没するそうで、病み上がりの小生は困ってしまった。秘かに周りのメンバーの様子を盗み見るが、皆さん引き返す素振りも見せない。赤澤リーダーは、たぶんここでパーティーを縦走継続組とリタイア組の2班に分けざるを得まいと覚悟していたらしく、そのために現地登山ガイドも2人帯同させていた。誰と誰がリタイアするかも実は事前に想定していたらしい・・・。

弱ったナア～、誰か先にリタイア宣言してくれないかナア～。それとも、本心は逃げ帰りたい一心であるがそれを言い出せない面々のために小生が蛮勇を振るうべきであるのか・・・云々と心が乱れた。しかし、一人でもリタイアすればこの先の団体行動に支障も出る。折角ここまで遠路遙々出掛けて来たのだし、それにもまして帰国してからシリウスの面々に何を言われるか分かったものではない。という次第で駄馬の鼻先に下山後のビールの楽しみだけをぶら下げて痛くて重い腰をやっと上げた。ア～ア。

縦走路や斜面は一気に咲いた高山植物でいっぱいだった。シャクナゲの一種であるというキバナシャクナゲが一面に咲いていた。シャクナゲの木は此処と同様な標高のヒマラヤでは大木であるが、寒い此処では背丈が僅か2cmくらいに矮小化していたが花は見事なものであった。私は花には全くのチンプンカンプンで名前を教えて貰ってもその場で右耳から左耳へ抜けていく口である。同行の皆さんは口々に花の名前を確認し合ったり珍しがって写真を撮ったりしていた。雪渓も谷筋には随分残っていた。

午前中は薄曇りだった空模様も白雲峰を巻く頃から厚い雲が広がり始めた。白雲峰は名前のおりいつも雲が掛かっているそうだが、一天俄かに掻き曇り猛烈な雷雨が襲ってきた。雨はともかく、雷様はだだっ広い裸地の山腹では隠れる場所もない。ゴロ・ゴロッと鳴る度に現地ガイドが身体を伏せろと叫ぶ。今にも落ちて来そうで生きた気がしなかった。



余りに恐ろしくて御叱呼をチビってしまった。

縦走路の途中から、対岸の湖岸に掘っ立て小屋のような物が見えた。天池の湖岸は全く自然のまま、前述の將軍様ご用達のケーブルカー以外には人工構造物は何も無い。この小屋は今から 70 年程前の地図が未だ空白の時代に、民族学者の梅棹忠夫が第三高等学校の学生時代にビヴァークしたという崇徳寺なる無人の寺が朽ち果てたものではなかろうか。今でこそ天池は一大観光地になっているらしいが、125 年前にインド連隊の士官であったヤングハズバンドが満州側から火口壁に登り着いた時分には如何に荒涼とした風景だったであろうか。厳冬期の白頭山に日本人として初めてポーラメソッドで登った京大探検隊の今西錦司も、山麓は匪賊、樹林帯は出口の無い監獄、山は零下 40 度の地獄であったとその紀行文に記している。現在でも韓国や中国のヒマラヤ遠征隊は冬季訓練のためにここに登っているようだ。

余談はさておき、重い足を引きずりならやとこさつとこ<sup>セウ ドゥンヌンソ</sup>海老背稜線から北坡登山口に下山した。西坡登山口を出発してから既に 9 時間半が過ぎていた。腰の骨折にはガレ場の登下降が堪えた。特に急なガレ場やザレの下りでは腰椎にド〜ンと荷重が掛かって激痛が走るの、クマのように四つん這いになって後ろ向きに下るしかない。時間的に皆さんの足を引っ張ってしまう結果となったが、病み上がり 2 年ぶりの山行を何とか落伍せずに皆さんに付いて行けたことにホッと胸をなで下ろしたのであった。

ここは天池からの唯一の湖水の落ち口で、長白瀑布<sup>ジャンベクポッポ</sup>という大きな滝があり、それを見るための遊歩道も整備されていたが、余り人影は無かった。ここで泊まった温泉ホテルは在日朝鮮人が経営する温泉ホテルでユカタ、丹前も用意されていて早速温泉に浸って疲れを癒した。お蔭で夕食のビールが渴いた喉に沁み通って美味かった。

翌朝はホテル近くの緑淵潭というゴルジュと滝の樹林や「地下(谷底)森林」と呼ばれる深い溪谷の森林浴でマイナスイオンを疲れた体に吸わせたりした。この森林公園は環境保全上厳重に管理されていて、チリーつ落ちていなかった。早朝から係員が木道を箒で掃き清めていたりしていた。

登山のことはこれくらいにして、後は満州の暮らしや民族のことについて見聞したことを少し触れておきたい。下山後、中国と北朝鮮国境の<sup>ドゥン</sup>図們という街に案内された。ロシアのウラジオストクへも近い場所である。小さな川を挟んで対岸は北朝鮮になっている。北朝鮮側は農地にできる平地が無いとかで山腹まで「耕して天に至」っていた。この川は<sup>トッマンヨ</sup>図們江と言い、河口は北朝鮮・ロシア国境線上で日本海に注いでいる大河であるが、この辺りでは未だ川幅が狭い。中国側の河岸は一大観光地になっていて、中国や韓国から沢山の観光客が来ていた。ここには北朝鮮側を舟で見るツアーも用意されていた。小さなイカダの観光舟からは北朝鮮の子供が岸で遊んでいる姿が見えた。



図們は、中国側が大きなビルも沢山あって栄えているのに対して、対岸の北朝鮮側は家並も貧しそうな佇まいに見えた。対岸の北朝鮮の住民は目の前の中国の繁栄や観光船で覗き見する観光客をどのような気持ちで見ているのであろうか。

対岸には首都平壤からの鉄道が通っていて、ここの国境から中国やロシア側に通じている。金正日が中国に行く時にはいつもここから入るということで、鉄道の国境線上には警備兵が2人手持無沙汰に立っていた。対岸の駅も見えたが小さなもので金日成か金正日の看板が掲げられていた。鉄道便は本数が少ないのか、或いは要人が乗る時しか運行しないのか、列車は陰も形も見えなかった。対岸の山の中腹には「2011 金正日將軍万歳・・・」とか何とかの大看板が設置してあった。図們江の中国側の山腹にも「毛沢東万歳」とか何かのこれまた大看板が対峙しているような。双方ともこのような政治の大看板と宣伝合戦がお好きなようだ。



今回の旅で始終我々にアテンドしてくれた日本語ガイドのお譲さんは道々のバスの中で中国や朝鮮民族にまつわる色々な話をしてくれた。彼女自身は延吉で生まれた中国人であるが、出自は朝鮮民族であるようで朝鮮民族に対する誇りが感じられた。延吉周辺は元々主に朝鮮からの移殖者が開拓してきた土地で、かつては朝鮮民族がメジャーで現在も延邊朝鮮族自治州となっているが、現在では内陸から漢人がどんどん進出して来ているようである。延邊の朝鮮民族も若者はより良い職を求めて、延邊を出て大陸の大都市や韓国、外国などに移住する者が多いので朝鮮民族の人口は減る一方だそうだ。

一方、延邊は中国の他の省に較べれば比較的住みやすい所でもあるので内陸部からの漢人が流入して来て、それだけ少数民族がマイナーになっているとのことだった。現在延邊の人口は50万人であるが、政府は漢人を更に呼び込んでこれを4倍の200万人に増やす計画だそうで、そのための住宅や企業や施設の開発が進んでいるようだ。

また、彼女は次のようなことも話してくれた。現在の北朝鮮は庶民は貧しい国である。この中国・延邊に親戚を持っている北朝鮮の人に限り年に一度だけ延邊の親戚を訪ねることが許されていて、必要な食料などを貰って国に持ち帰ることができる。延邊の親戚は北朝鮮の親戚に、延邊に滞在している間は美味しいものを沢山食べてともてなすのであるが、北朝鮮の人はほんの少ししか食べないのだそうだ。ここで飽食の癖がつけば、自国に帰国してから少しの食べ物では満足できなくなり、即ち自分の首を絞めることになるからだそうである。何とつましやかなことではないか。彼女の話によると、北朝鮮の庶民は貧しくても心清く美しく生きていて微笑を常に絶やさず、先祖を敬い他人を思い遣ってつましく過ごしているとのことであった。貧しい家に住んではいるが、常に掃除が行き届いているようだ。旅行した中国人が「もっと贅沢な暮らしがしたくないか」と言った時に、彼女達は次のように応えたという。「貴方のような大金持ちがゴミの山に住んでいることを誠にお気の毒に思う」と。

彼女は全体としては未だ進学率が低い中国では大学卒のエリートで、ビジネスの面でも成功者の部類と思う。また自身も朝鮮民族とはいえ、れっきとした中国人であるのだから、何故リスクが多いかも知れない同胞への想いを敢えてするのだろうか。私のこのような無礼な質問に対しても彼女は単純明快に答えてくれた。「朝鮮民族は南と北に分断され、また海外にも離散させられたディアスポラ（離散民族）である。内政上でも対外的にも複雑な問題を抱えている国であるが、それは庶民の心には何の関係もない。

そのような状態の中で、同じ畑で育った同胞が世界のどこで生活していようとも、お互いのアイデンティティーを尊重し合い、同じ先祖を敬い、自分の出自の民族とその文化に誇りを持って、お互いに助け合うことは当然ではないでしょうか。我々単一民族にはピンとこないかもしれないが、列強の勝手によって引き裂かれた民族の悲哀が滲んでいるように思う。かつての日本も列強の一角であって、大東亜共栄圏の美名のもとに朝鮮や満州に侵攻したが、彼女はそのようなことには一切触れなかった。

ディアスポラになりながらも、そのアイデンティティーと民族文化を守り、遠くに離散した同胞を気遣いながら、しかもその土地に深く根を下して頑張っている人々に心からの拍手を送りたい。

このようなことを考えながら、凶們から延吉に戻るバスの中で車窓に広がる茫洋たる満州の景色を見ていたら、突然東海林太郎の「国境の町」が心に浮かんできた。80年近く前の歌で黒竜江省の南部、ロシアとの国境近くの満州が舞台。先ほどまでいた凶們からも近い場所である。この歌はもう何十年間も口にすることがなかったのに、何故突然出て来たのであろうか。満州の人々の暮らしや歴史を考えたりしたこともその誘因であるかも知れない。また、昔母親が語って聞かせてくれた朝鮮からの引き揚げの苦労話を思い出したのかも知れない。引き揚げの時、母親は父より一足先に独りで幼い私を背負い、女性は途中で匪賊に拉致されるからと男装をして何日も歩き続けたと言っていた。苦労して興安丸に乗り舞鶴に上陸した。3歳になっていた私は1歳くらいの体重に痩せ細ったという。嗚呼。

♪櫓の鈴さえ 寂しく響く 雪の曠野よ 町の灯よ 一つ山越しゃ 他国の星が 凍りつくよな <sup>くにざかい</sup> 国境 ♪  
♪故郷はなれて はるばる千里 なんて想いが 届こうぞ 遠きあの空 つくづく眺め 男泣きする宵もある ♪  
♪行方知らない さすらい暮し 空も灰色 また吹雪 想いばかりが たただ燃えて 君と逢うのは いつの日ぞ ♪  
(完)